旺文社文庫

次郎物語（下）

第五部

下村湖人著

旺文社文庫

次郎物語(下)

第五部

下村湖人著

旺文社

文社文庫」刊行のことば

代においても、書物は人間の最大の喜びで救いである。若い日読んだ書物は、人間のて影響をあたえ、第二の天性となり、人格ろう。

かかる観点から旺文社は、若しての使命感にたって、ここに内容は、洋の東西にわたり、時学・科学・伝記・随筆・思想、も知識人たらんとする者が、生若い日一読すべき価値のあるもんとするものである。

読むに価値あるものを、できやすく、読みやすく提供するこる。出版道義を強く信奉せんと目的にひたむきに献身するもの志を理解されご支援あらんこと

〔編集顧問〕（五十音順）
木村　毅　茅　誠司　亀井勝一郎
森戸辰男　中島健蔵　塩田良平

旺文社文庫　220円

初版発行　湖　人
重版発行　好　夫
本印刷株式会社
株式会社 文 弘 社

発行所 © 株式会社 旺　文　社
東京都新宿区横寺町
電　話 (269)－2111（大代表）

（中村・穴口）　1C33-6-4(6,8)

目次

第五部 三

解説

人と文学 福田清人

作品解説（第一部・第二部）（上巻）

〃（第三部・第四部）（上巻）

〃（第五部）（中巻）

作品鑑賞 三二六

「次郎」と私 三三〇

少年の頃 横地倫平（中巻）

台北高校時代の思い出 内田清治（上巻）

代表作品解題 滝沢寿一 三三

参考文献 三三五

年譜 三三七

三三八

挿絵 谷 俊彦

原文は新かなづかいに改めたほか、原文の表現をそこなわない範囲で現代表記法にもとづいて漢字を削減した。また、難解な語句や事項には、小活字で傍注を加えた。

（編集部）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第五部

一　友愛塾・空林庵

ちゅんと雀が鳴いた。一声鳴いたきりあとはまたしんかんとなる。

これは毎朝のことである。

本田次郎は、この一週間ばかり、寒さにくちばしをしめつけられたような、そのひそやかな、いじらしい雀の一声がきこえて来ると、読書をやめ、そっと小窓のカーテンをあけて、硝子戸ごしに、そとをのぞいて見る習慣になっている。今朝はとくべつ早起きをして、もう一時間あまりも「歎異抄」(1)の一句一句を念入りに味わっていたが、そとをのぞいて、いつもと同じ楓の小枝の、それも二寸とはちがわない位置に、じっと羽根をふくらましている雀の姿を見たとたん、なぜか眼がしらがあつくなって来るのを覚えた。

かれの眼には、その雀が孤独の象徴のようにも、運命の静観者(2)のようにも映った。夜明けの静寂をやぶるのをおそれるかのように、おりおり用心ぶかく首をかしげるその姿には、敬虔な信仰者の面影を見るような気もした。

雀は、しかし、そのうちに、ひょいと勢いよく首をもたげた。同時に、それまでふくらましていた羽根をぴたりと身にひきしめた。それは身内に深くひそむものと、身外の遠くにある何かの力とが呼吸を一つにした瞬間のようであった。そのはずみに、とまっていた楓の小枝がかすかにゆれた。小枝がゆれると、雀ははねるようにぴょんと隣りの小枝に飛びうつった。その肢体には、急に

(1)　親鸞の直話を集めて、真宗の安心の正義をのべた一巻の書。親鸞の死後成立、唯円の選といわれている。

(2)　(自分は行動しないで)成り行きを静かに見守っている人。

若い生命がおどりだして、もうじっとしてはおれないといった気配である。

間もなく雀は力強い羽音をたて、澄みきった冬空に浮き彫りのように静まりかえっている櫟の疎林をぬけて、遠くに飛び去った。そして、すべてはまたもとの静寂にかえった。

次郎は深いため息に似た息を一つつくと、カーテンを思いきり広くあけ、机の上の電気スタンドを消した。そして、外の光でもう一度「歎異抄」のページに眼をこらした。

机の上の小さな本立には、仏教・儒教・キリスト教の経典類や、哲人の語録といった種類のものが十冊あまりと、日記帳が一冊、ノートが二三冊たててあるきりである。次郎は、どういう考えからか、一月ばかりまえに、自分の蔵書の中から、それだけの本を選んで座右におき、ほかはみんな押し入れにしまいこんでしまったのであるが、このごろでは、そのわずかな本のいずれにもあまり親しまないで、ほとんど「歎異抄」ばかりをくり返し読んでいるのである。

*

次郎が郷里の中学校を追われてから、もうかれこれ三年半になる。父の俊亮が退学の事情をくわしく書いて朝倉先生に出してくれた手紙の返事が来ると、かれはすぐ上京して先生の大久保の仮寓に身をよせた。先生の上京からかれの上京までに二十日とは日がたっていなかったので、かれが着京したころには、先生自身もまだ十分にはおちついていず、運送屋から届けられたままの荷物が、玄関や廊下などにごろごろしていた。次郎は、はじめの十日間ばかりは、朝倉夫人と二人で、毎日その整理に没頭した。

「本田さんとは、よくよくの因縁ですわね。同じ学校を追われた先生と生徒とが、また同じ家に住むなんて……」

次郎を東京駅にむかえてくれた朝倉夫人は、電車に乗って腰をかけると、すぐしみじみとそういったが、次郎は、荷物を整理しながらも、夫人が心の中でたえず同じ言葉をくり返しているような気がして、うれしくてならないのだった。

先生は、毎日外出がちだった。帰りも、たいていは夜になってからで、夕食をともにすることもまれだった。たまに家におちつく日があっても、夫人とも、次郎とも、めったに口をきかず、何か考えこんでは、心にうかんだことをノートに書きつけるといったふうであった。

ところが、荷物もあらましかたづき、階下の六畳二間を先生の書斎と茶の間兼食堂に、二階の四畳半を次郎の部屋にあて、夫人の手で簡素ながらも一通りの装飾まで終わったころになって、先生は、ある夕方、外出先から帰って来て室内を見まわしながら言った。

「せっかく整理してもらったが、近いうちにまた引越すことになるかもしれないよ。」

「あら。」

と夫人は、めったに先生には見せたことのない不満な気持ちを、かるい驚きの中にこめて、

「やはり、こちらでは手ぜまでしょうか。」

夫人がそういうと、次郎も、それが自分のせいだという気がして顔をくもらせた。先生は、しかし、笑いながら、

「手ぜまなのは、覚悟のまえさ。越したところで、どうせ今度の家も広くはないよ。あるいは、ここよりも窮屈になるかもしれん。実は、はっきり決まらないうちに話して、ぬか喜びをさせるのもどうかと思って、ひかえていたんだが、私がかねて考えていたことが近く実現しそうになったのでね。」

「考えていらしったことといいますと？」

「青年塾のことさ。」

「あら、そう？」

夫人はもう一度おどろいた。それは、しかし、深い喜びをこめたおどろきだった。

「土地や建物も、あんがいぞうさなく手に入ったんだ。何もかも田沼さんのお力でできたことなんだがね。」

田沼さんというのは、朝倉先生が学生時代から兄事し崇拝さえしていた同郷の先輩で、官界の偉材、というよりは大衆青年の父と呼ばれ、若い国民の大導師とさえ呼ばれている社会教育の大先覚者で、その功績によって貴族院議員に勅選(1)された人なのである。次郎はまだ一度もその風貌に接したことはなかった。しかし、朝倉先生の口を通して、およそその人がらを想像していた。先生のいうところでは、「田沼さんは、聖賢(2)の心と、詩人の情熱とをかねそなえた理想的な政治家」であり、「明治・大正・昭和を通して、日本が生んだ庶民教育家の最高峰」だったのである。

次郎は、「田沼さんのお力で」という言葉をきいた瞬間、何か霊感に似たものが胸にわくのを覚えた。朝倉先生の青年塾の計画については全くの初耳であり、ただ先生が上京以来、普通の学校教育以外のことを何かもくろんでいるらしいと想像していただけだったが、田沼――朝倉――青年塾――と、こう結びつけて考えただけで、近来日本の空を重くるしくとじこめている雲の中を一道のさわやかな自由の風が吹きぬけて行くような心地が、かれにはしたのである。

(1) 勅命（天皇の命令）によって選ばれること。明治憲法においては、国家に功労があったもの、または学識のあるものが、満三十才以上の男子の中から特に勅命によって、貴族院議員に任ぜられた。任期は終身。 (2) 聖人と賢人。徳がすぐれ、かしこい人。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

同時にかれはきわめて当然の事として、かれ自身がその青年塾の最初の塾生になる事を考えていた。朝倉先生に師事しつつ、塾生の立場から塾風樹立の基礎固めに努力し、しかもしばしば田沼という大人格者に接して親しく言葉をかわしている自分を想像すると、胸がおどるようだった。

朝倉先生は、そのあと、計画中の青年塾について、あらましつぎのようなことを二人に話した。

場所は東京の郊外で、東上線の下赤塚駅から徒歩十分内外の、赤松(1)と櫟の森にかこまれた閑静なところである。敷地は約五千坪、そのうち半分は、すぐにでも菜園につかえる。さる老実業家が自分の隠居所を建てるつもりで、いろいろの庭木なども用意し、ことに、千本にも近いつつじを植え込んでおいたところなので、花の季節になると、錦をしいたような美観を呈する。

隠居所の建築は、老実業家の急死で取りやめになった。相続者はその追善(2)のために、だれか信頼のできる人で、精神的な事業に利用したいという人があったら、土地だけでなく、相当の建築費をそえて寄付したいという意向をもらしていた。それをある人が田沼さんの耳に入れた。田沼さんは、満州事変以来日本の流行のようになっている塾風教育が、人間性を無視した、強権的な鍛練主義一点ばりの傾向にあるのを深く憂えていた際だったので、すぐそれを自分の新しい構想に基づく青年塾に利用したいと考えた。しかし、それには、自分と思想傾向を同じくし、かつ専心その指導に任じてくれる人がなければならない。自分自身でやって見たいのは山々だが、各方面に関係の多いからだでは、それが許されないし、ことに最近は自分が中心になって、憲政擁護(3)と政治浄化の猛

(1) 木の皮が赤く、幹がまっすぐにのびる松。山地に多い。　(2) ここでは、死者のめいふくを祈って、その人にふさわしい行事をすること。　(3) 官僚政治または閥族政治を攻撃して、憲法によって行なう、いわゆる立憲政治をまもること。

運動を展開している最中なので、それから手をひくわけには絶対に行かない。そんなことで、内々適任者を物色していたところだった。そこへ、たまたま朝倉先生の五・一五事件批判の舌禍事件[1]が発生し、つづいて教職辞任となり、そのことで二人の間に二三回手紙をやり取りしている間に、どちらも願ったり叶ったりで、朝倉先生が青年塾に専念する約束が成立した。そして先生の上京後、二人で懇談を重ねた結果、具体案を作って寄付者に提示したところ、先方では、その根本方針に双手をあげて賛成し、一切を田沼さんの自由な処理に委ねたばかりでなく、事情によっては年々経営費の一部を負担してもいいということまで申し出て来ている。

「そんなわけで、経費の点では全く心配がないんだ。まるで夢みたような話さ。実は、私としては、それでは安易にすぎて多少気恥ずかしいような心地がしないでもない。しかし、われわれの塾堂の構想からいうと、経費のことなどでじたばたする必要がないということもまた一つの大事な条件なんだ。むろん勤労はたいせつだし、自給自足も結構だ。しかし教育の機関が金もうけに没頭しなければ立って行けないというようでも困るからね。田沼さんもそのことを言って非常に喜んでいられたよ。」

「すると、どんなような塾ですの？」

夫人がたずねた。

「それはおいおいわかるだろう。どうせお前には寮母みたいな仕事をしてもらいたいと思っているし、そのうち印刷物もできるから、それについてみっちり研究してもらうんだな。しかし、おそらく実際に生活をはじめてみないと、ほんとうのことはのみこめないだろうね。」

（1）ある発言がわざわいとなって、それにもとづいて起こる事件。

「何だか、むずかしそうですわ。」
「むずかしいといえば非常にむずかしいし、平凡だといえばしごく平凡だよ。」
「一口にいって、どんなご方針ですの？」
「友愛感情に出発した共同生活の建設とでもいったらいいかと思っているんだ。しかし、こんな生煮えの言葉をそのまま鵜呑み(1)にされても困る。それよりか、これまでの学校でやって来た白鳥会の気持ちを、塾の共同生活の隅から隅まで生かす、といったほうが呑みこみやすいかね。」
「そういっていただくと、あたしたちにもいくらか自信が持てそうですわ。ねえ、本田さん。」
「ええ、ぼく、先生のお気持ちはよくわかるような気がします。」
次郎は頬を紅潮させてこたえた。
「あんまり自信をもってのぞんでもらっても困るよ。白鳥会の精神がいいからといって、最初からそれを押しつける態度に出たら、かんじんの精神が死んでしまうからね。お互いが接触に接触を重ねて行くうちに、自然に各人の内部からいいものが芽を出し、それがみごとに共同生活に具体化され、組織化される、そういったところをねらうのが、今度の塾堂生活なんだ。」
夫人も次郎もだまってうなずいた。
「まあ、しかし、こういうことはお互いにゆっくり話しあうことにして、さっそくかたづけなければならないのは、本田君の問題だ。中学校も五年になってからの転校は、どうせ公立では見込みがないので、私立のほうの知人に二三頼んではある。しかし、夏休みのせいか、まだはっきりした返事がきけないでいる。それがきまるまでは、君も落ちつかないだろうと思うが、どうだい、私が紹

(1) 鵜が魚をのむようにかまずにのみこむ意から、意味をよく理解しないで、そのまま採ること。

介状を書くから、君直接会ってみないか。」
「はあ――」
次郎は気がすすまないというよりは、むしろ意外だという眼をして先生の顔を見た。
「私立ではいやなのか。」
「そんなことはありません。」
「じゃあ、会ってみたらいいだろう。私立でも、まじめな学校では、やはりいちおう本人に会ってみてからでないと入れてくれないからね。」
「先生！」
と、次郎は急にからだを乗り出し、息をはずませながら、
「ぼくは先生の青年塾にはいるわけには行かないんですか。」
「青年塾に？　君が？」
朝倉先生はおどろいたように眼を見はった。
「ぼくは、中学校を卒業することなんか、もうどうでもいいんです。先生が青年塾をお開きになるのを知っていながら、普通の中学校にはいるなんて、ぼくはとてもそんな気にはなれないんです。」
「ばかなことをいうものじゃない。私の計画している青年塾は、学校とはまるでちがうんだよ。現に働いている青年たちのために、ごく短期間の、――今のところながくてせいぜい二か月ぐらいにしたいと思っているが、――まあいわば一種の講習をくりかえして行くようなものなんだ。そんなところにはいって、君、どうしようというんだね。」
次郎はだまりこんだ。かれは自分が想像していた塾とはかなり性質の違ったものだということが

わかり、ちょっと失望したようだった。しかし、どんな種類の塾にもせよ、その最初の塾生となって、塾風樹立に協力したいという希望は、やはり捨てたくなかったのである。

「そりゃあ、私としても、一度は君に一般の勤労青年と生活をともにする機会を作ってもらいたいとは願っている。しかし、それは今でなくてもいいことなんだ。今のところは、何といったって中学を出て、上級の学校に進むように努力することがたいせつだよ。」

「ぼく、ほんとうは、先生が青年塾をお開きになるんなら、一生先生の下で働かしていただきたいと思っているんですけれど。」

次郎はいくらかはにかみながらも、哀願するように言った。

「ありがとう。それは私ものぞむところだ。実は、機会が来たら、私のほうから君に願いたいと思っていたところなんだ。しかし、それにはやはり一通り基礎的な勉強をしてもらわなくちゃあ。」

「勉強は独学でもできると思います。それよりか、最初から先生の下でいろんな体験を積むことがたいせつではないでしょうか。」

「塾の大先輩になろうとでもいうのかね。はっはっはっ。」

と朝倉先生は愉快そうに笑ったが、すぐ真顔になり、

「なるほど、塾の気風を作るには、最初から君のような人にはいってもらえば大変ぐあいがいいね。これは、君のためというよりか、私にとってありがたいことなんだが。」

次郎は、眼をかがやかした。朝倉先生は、しかし、また急に笑いだして、

「ところで、塾はまだできあがっているわけではないんだよ。建築その他に、少なくも三か月は見ておかなければならないし、趣旨を宣伝したり、募集の手続きをしたりしていると、いよいよ塾生

が集まって来るのは、早くて半年後になるだろう。あるいは、君が中学校を卒業したあとで、第一回目が始まるということになるかもしれない。とにかく、君の転校の手続きだけは早くすましておくことだよ。何だかお互いに青年塾の夢にすっかり興奮してしまって、現実を忘れていた形だね。はっはっはっ。」

夫人も次郎もつい笑いだしてしまった。

こんなふうで、次郎はとにもかくにもある私立中学に通いだした。むろん学校にとくべつの期待もかけていなかったし、したがって大した不満も感じなかった。むしろ、科目によっては、郷里の中学におけるよりも学力のある先生がいたので、勉強にはかえって実がはいるくらいであった。

そのうちに、塾堂の建築も次第にはかどりだした。日曜には次郎もかかさず朝倉先生といっしょに下赤塚の駅におりたが、そのたびごとに、かれは、建物の位置とにらみあわせて、つつじその他の小さな樹木を幾本かずつ植えかえた。先生夫妻の住宅——その一室に次郎も自分の机をすえさしてもらうことになっていた——は、本館とは別棟にして、まず第一に着手されたが、その付近の小さな樹木は、ほとんどすべて次郎の手で整理され、南側には、いつの間にか小さな庭園らしいものさえできあがっていたのである。

住宅が完全にできあがったのは、その年の十月はじめだった。夫人と次郎とは、それでまた引越しさわぎに忙殺されたが、それはいかにも楽しい忙しさだった。荷物を作ったり、解いたりする間に、次郎は、「本田さんとは、よくよくの因縁ですわね」といったかつての夫人の言葉を、何度思いおこしたかしれない。それに夫人は、このごろ、いつとはなしに、かれを「本田さん」と呼ぶ代わりに「次郎さん」と呼ぶようになっていたので、かれは心の中で、「次郎さんとは、よくよくの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com